

米子城フォーラム 「城めぐリストとお城博士の米子城わくわく講座」

・日 時 平成28年10月1日(土)

13:00~16:30

・場 所 ふれあいの里 大会議室

●講演2

「3番勝負！ここがすごいぞ米子城」

萩原 さちこ 氏 (城郭ライター・編集者)

○司会 続きまして、次の講演に移らせていただきます。「3番勝負！ここがすごいぞ米子城」と題しまして、城郭ライター、萩原さちこさんのご講演です。

ここで簡単ではありますが、講師の萩原さちこさんのプロフィールをご紹介します。萩原さちこさんは、小学校2年生で城に魅せられてから城めぐりがライフワークになり、印刷会社、出版社、制作会社、広告代理店などの勤務を経て独立。現在はフリーライターとして執筆業を中心に、テレビ、ラジオなどのメディア出演、イベント出演、講演、講座、ガイドのほか、お城イベントプロジェクト「城フェス」の実行委員長もこなされています。

公益財団法人日本城郭協会学術委員会学術委員、文化財石垣保存技術協議会会員、日本城郭検定公式サポーターなどいろいろされており、お城の魅力をわかりやすく楽しく伝えるをモットーとされています。

それでは萩原さん、よろしく願いいたします。(拍手)

○萩原氏 皆様こんにちは。ただ今ご紹介をいただきました萩原さちここと申します。今日はお呼びいただいて、そしてたくさんの方に来ていただいて、とてもうれしく思っております。私はふだん東京に住んでいるものですから、少し距離がある場所ではあるんですけども、初めて米子でお話をさせていただきます。

中井先生の後でお話をするというのはかなりのプレッシャーといたしますか、おこがましい限りなんですけれども、また今、大それた感じでご紹介いただきましたが、要はただの城好きなんです。見てわかるとおり、何かその辺の小娘が来たなというような、お城好きが高じて手広くお仕事にしまっている者です。

ですので、聞き応えのある学術的、専門的なお話というのはあまりできないかもしれませんが、とにかくお城は楽しい、何が楽しいのか、そんなところを私の経験談とともにお話をさせていただいて、また、皆様少なからずお城にご興味があったり、もちろん米子城にご興味があると思いますから、どんなところが楽しいのか、そんなところをお話しさせていただければなと思っています。1時間ほどですけれども、おつき合いいただければと思います。

まずは根本的なところですが、城めぐりの楽しみというところですね。今回、「3番勝負！

ここがすごいぞ米子城」というタイトルでお題をいただきまして、3番勝負で米子城の魅力に迫っていくわけです。結論から言いますと、3番勝負、全て米子城の圧勝ということになるわけですが、その前に導入というか、城めぐりって何が楽しいのかというところをお話しさせていただきたいなと思うんですね。

というのも、どうも最近、お城というものの見えない壁が取っ払われ始めているわけで、中井先生もおっしゃいましたが、最近、お城に行く方がすごく増えているんですね。私も、かつては城で同じ女性に会うということはほぼ皆無で、ちょっと浮いた存在だったわけですが、最近はどうもそんなことはなく、老若男女問わずたくさん城を訪れるようになって、城への関心、理解というのがとても深まっているなど感じる場所です。

そして、米子城のような、いわゆる建造物がないお城、こういったものの価値というのも、私のような素人でも、お城ファンでも何か語り出しちゃうような、そんな時代になっていると少なからず言えるんじゃないかと思うんですが、やはりまだ、世の中としては天守がないと城じゃないみたいな風潮があると思うんですね。ですので、もしかして皆様の中にも米子城の魅力にまだ気づいていられず、天守がないからあの城はだめだとか、石垣しか残ってないとか、そんなふうに思われてる方もいらっしゃるかもしれませんが、そんなことないよというところをわかっていただけたらと思います。

城の楽しみ方は千差万別なんだって書いてありますけれども、いろんなところでお話をさせていただきまして、皆さんやはり天守がお好きなんですね。せつかくお城に行ったら天守見たいよっていうのは何となくわかるんですが、城を楽しむコツ、結論を言ってしまうと、ご自分なりのツボみたいところを見つけられるのがいいんじゃないかなと思うんですね。

私が聞いた話によると、男性と女性は脳の違いがありまして、男性というのは年表を追っていく、覚えていくのが得意なんだそうですね。なので、割と歴史の得意な方が多いそうです。これに対して女性というのは、それがあんまり得意じゃない。脳がそうできてますから、しょうがないんですね。ですから、そう考えていきますと、男性と女性の城の楽しみ方、歴史の楽しみ方って違って当然ということになるわけですし、やっぱりお話ししていると、歴史が苦手な女性の方、多いんですね。そして、どうも歴史を知らないと城に行つてはいけないというような、固定観念が多少あるようにも思いますけれども、決してそんなことはないというのを強く最初に言っておきたいんですね。ですから、女性の場合は、歴史はわからないけれども、天守が格好いい、天守きれいだから行きたいという方、圧倒的に多かったですね。あっ、うんうんとうなずいていらっしゃる方、そうですね。それでもいいと思うんです。それもお城めぐりのご自身なりのツボの一つですから。

私がおもしろいと思いますのは、天守って最初はどれも一緒に見えるんですが、見比べていくと全部違うんですね。お城の究極のおもしろさは、2つとして同じものがないというところだと思うんです。今、全国に天守が12残っています。12しかないのかなって思いますけれども、12制覇するのって、そこそこ大変なわけですよ。その12を見比べてみますと、

全部違うんですね。大きさも違う、形も違う、デザインも違う、装飾も違う、それからつくられている場所も違う、こんなに違うんだってやっぱり気づく。これが一つのおもしろさです。天守だけでもこれだけ楽しめるわけです。

なんですけれども、冒頭に言いましたように「天守イコール城」ではないわけです。この例えがわかりやすいかどうかわかりませんが、お城というのはディズニーランドみたいなものなんですよ。いろんなエリア、区画、そういったものが配置されていて、その中心部分に天守がひとつ、おっきいシンボルタワーが建っているような構造なわけですから、せっかくディズニーランドに行ったのに、シンデレラ城だけ見て帰ってくるというのは非常にもったいない。いろんなエリアもそれぞれ楽しんで、それからいろんなアトラクションも、もう朝から晩まで目いっぱい楽しむのがディズニーランドだと思いますが、お城もそんな楽しみ方ができるわけですよ。天守以外にもたくさんの^{やぐら}櫓、城門、建物もありますし、区画がどんなふうに配置されているのか、こういったところですね。間取りとかお好きな方はハマると思います。

それから、城というのは長い歴史の中で、姿形、つくられる場所、役割がさまざまに変わっていくわけですが、やはりいつの時代につくられたのかということと、中井先生もおっしゃっていましたが、一つのお城には必ずドラマがあって、つくられてそのままということはなくどんどんどんどん変化していくものですから、そんなドラマを見るのが楽しいなというのも切り口のひとつとしてあると思います。

そして、いかに姿形が変わっても、やはり軍事施設だということがいちばんの魅力かなとも思うんですね。おうちではありませんので、必ず知恵、工夫、そういったものが込められています。私がお城を歩いていておもしろいなと思いますのは、いちいち理由があるからなんですよ。この辺何となく景色がいいから城をつくろうかなということはないわけで、何かしら必ず意味がある。そんなことを考えるのも楽しみのひとつかなと思っています。そして、与えられた役割とか、天守ひとつとっても、つくった人のセンスですとか、あとは懐具合ですとか、そういったものがリアルに反映されるのもおもしろいところかなと思います。

あれこれ全部、歴史も知って、立地も覚えて、構造もいろいろ知らなきゃいけない、設計も読み解いていかなきゃいけないと考えていくと大変なので、いろんな楽しみ方の中で、ご自分でこの部分、このポイントが気になるなというところをひとつ見つけていただいて、まずはご自分なりのツボ、私はこういう見方が好きだということを発見して見比べていただくと、城の本質、横顔、こういったところが見えてくるんじゃないかなというふうに思っています。

つまりは、お城めぐりにルールはありませんので、自由に歩き楽しむことをしていくと、皆さんなりの楽しみもあって、私もそういう方の、自分にはない視点での見方っていうのを聞くのが楽しいものですから、そんなふうにして城を楽しんでいけるといいんじゃないかなというふうに思っています。

前置きが長くなりましたが、そういった楽しみ方の中で、今日はキーワードを3つ上げて、それを3番勝負として米子城の魅力に迫っていきたいと思います。

まずは、キーワード①「眺望」です。これは米子の皆さんには見なれた風景かもしれませんが、とにかく米子城は、全国の城の中でもトップクラスの眺望のよさかと思えます。先月久しぶりに登らせていただいて、本丸のところにある登城ノートみたいなのを見てましたら、皆さん、景色がいい、景色がiiiって書かれているんですね。私もつい書いてしまいましたけれども、書きたくなってしまふほどの眺望のよさっていうところかと思えます。

さて、眺望からどんなことを想像したりして楽しめるのかっていうところをお話したいのですが、まず、眺望がいい城という、中井先生のお話にもありました、竹田城ですね。この雲海に浮かぶ天空の城、有名になり過ぎて、人が行き過ぎて遺構が壊れるという状況で、あまり紹介したくないんですけれども、こんなふう^に雲海に浮かんで、山上、標高353メートルでしたか、その上に築かれた石垣が頭を出すと。眺望という意味では、城を見る眺望ですけれども、その風景が有名になりました。

そもそも何でこんなふうに見えるのかというところですね。それは竹田城が独立した山塊に築かれているからなんですよね。周りに何もなしの独立した山につくられているからこんなふうに見えるわけで、これってあまり気にとめませんけれども、すごく重要というか、根本的なところなわけですね。つまり、この竹田城の場所ですね、そして役割、こういったところがこの眺望から連想していけるんじゃないかなというふう^に思えます。

今でいうと姫路からぐうっと上に播但道が上がってきたところ、^{たじま たんば}但馬と丹波の国境に竹田城があつて、ここは但馬街道と山陰道が通る場所でもあり、但馬街道を南下すると姫路、山陰道を西に行くと豊岡、鳥取、東に進むと福知山という場所なわけですが、この竹田城の石垣がつくられたのは1585年に入った^{あかまつひろひで}赤松広秀以後になりますが、もともと竹田城の発祥を見ていきますと、15世紀半ばなんですね。但馬守護の山名氏と、それから^{はりま}播磨守護の赤松氏の軍事衝突がきっかけというふう^に言われているわけです。つまりは、すごく大事な場所にあるということなんですね。

米子城が築かれた時期より少し前の時代になりますから、高い山城につくられてたつていうことにはなりますが、やはりそういった立地面ですね、これがすごく重要になってきた。だから、見晴らしがいいのは当然なんだということがわかるわけです。これは本丸、天守台から見た眺望ですけれども、朝霧が晴れますと街道というか、城下のほう^が丸見えになりますから、軍事施設としてのこういった眺望というのが堪能できるわけですね。あまり雲海だけに気をとられずに、何が見えるのかっていうのを考えていくと、お城の役割というか背景が見えてくるということになると思えます。

お城の役割、目的というところの話をしていきますと、少し時代が飛びまして、近世ですね。播但のずっと南下したところにある姫路城ですけれども、これはとにかく美しい城、見ばえのいい城ということで、日本でいちばん有名なんじゃないかなと思えますが、この姫路城あたりになってくると、今度はつくられる場所も変わってくるわけですね。

関ヶ原合戦の翌年だから、1601年に築城開始されますので、やはりつくられる場所は、

高い山ではなくて、少し標高の低い小高い山になってくるわけですが、そうするとお城にも変化があって、今度は、天守がつくられるようになるんですね。役割でいいますと、大坂城ではまだ豊臣秀頼が健在ですから、大阪を取り囲むように主要な街道の周りに城をつくっていった、いわゆる軍事拠点のひとつというふうに言われているわけですね。

この辺はすごくおもしろいなと思ひまして、城下からの眺望といった意味でいいますと、やはり天守というのは象徴の役割ですね。こういったものが中世から近世に変化していくお城の中で生まれてくるわけですが、天守というのはシンボルタワーであって、けんらん豪華さ、権力、財力の象徴として敵を屈服させるような、そんな側面が城に生まれてくるわけです。

しかし、本来の役割を考えていきますと、やはり重要な軍事拠点ということですね。姫路城の天守も見っていきますと、街道上にありつつも、やっぱり戦う気はすごくあるわけですね。象徴としての側面、それから軍事施設としての側面、そういったものが入り混じってくるようなところがありますが、特に江戸時代といえますか、1600年を超えますと、象徴としての色が濃くなってるんじゃないかなというところがあって、そこがすごくおもしろいと思います。

このあたりは、後ほど中井先生ともお話をしたいなと思っているんですが、何が言いたいかといえますと、米子城の眺望からどんなことを思えるのかというところですが、竹田城にあるような軍事的な側面もありつつ、姫路城にあるような、何か見せるような側面、これも共存しているのが米子城の魅力なんじゃないかなと思うんですね。

ものすごくいい眺望ですが、これは中井先生が先ほどお話しされたように、やはり海というものをすごく意識しているわけです。それは軍事施設としての立地がすごく重要になってきて、海を取り囲むような、海を味方にするような、そういった城づくりをしているわけですが、米子城を歩いてみますと、やはり米子城そのものを象徴とするような、見せていくような、何というんでしょう、城下からも見える、城そのものを、山そのものを美しく見せるような、そういった意図も感じるわけですね。そんなところを感じられるのが米子城の眺望のおもしろさかなというふうに思っています。

あとは単純にこの眺望の魅力なんですけれども、竹田城のような中世の城に行くと、一部分からの景色はけっこうよかったりするんですね。街道からの敵の進軍に気づくため、山そのものが監視台になっているわけですから、敵が攻めてくる方に向けてやはり眺望がよくなってるわけですね。ですので、今も登ると、あっ、こっちの眺望はいいなっていうのはあるんですが、米子城の場合は、360度ぐると眺望がいいんですね。これはすごく違いとしておもしろいなと。つまりは、360度ということは、どこから見てもきれいに見えるようにつくってあるんじゃないかなと、すごく私は感じるんです。周りからもよく見える、城からもよく見える、これはすごく気になるころではありますね。

木がもうちょっとないとうれしいないつも思いますが、皆さんもよくご存知のとおり、市内のどこにいても、米子城がどこにあるかがわかる。この存在感のすごさっていうのが米子城の本質っていうものを物語っているんじゃないかなんていうふうに思っています。

深浦のところは、後ほどお話をしたいと思えますけれども、ここもまた違った風情があるというか、少し閉鎖的な感じで、ここから毛利水軍が出ていったのかなんていうのを想像しているところですが、商業のための外堀のところとはやっぱりちょっとイメージが違うわけですね。

これは米子城に掲げられている案内看板をそのまま写真に撮ったものなんですけれども、私は360度、海以外の眺望がいいのも米子城の魅力だと思っています。おもしろいなと思いますのは、内堀はもう既に埋まってしまっていますが、この外堀の一部が残っているのと、寺院が並んでいるのが、本丸から見えるんですよ。こういった江戸時代に入って拡張した城下が丸ごと見えるっていう眺望、これも全国にそんなに数がないわけで、そのあたりも私は米子城の眺望の魅力かなというふうに思っています。

というわけで、若干こじつけもありますし、話し足りないところもありますけれども、米子城すごいぞってことです。山城としての単純な景色のよさだったり、街道を見おろすという眺望のよさだったり、竹田城、それから姫路城の立地、役割としてのあの場所なんですけれども、今、市街地化していて、眺望がいいかっていったらそうでもない。それに比べて、米子城というのはやはり軍事施設としての意図もすごくよくわかる眺望でもありますし、また、つくった吉川の美意識、そういったものも感じられるような絶妙なロケーションだなというところが感じられますので、米子城の勝利ということで、1勝としたいと思います。笑いが起きているということは、ちょっと無理がありますかね。(拍手) あっ、ありがとうございます。いいです、いいです、もう、そんなもんですから。こんな感じで進んでいきますけれど。

次に、キーワード②「設計」です。いわゆる縄張なわばりですね。お城の軍事的な設計のお話ではなくて、今日、明日、米子城を歩いたときに、どんなところが楽しめるのかっていうお話をしたいと思えます。結論から言いますと、米子城というのは古絵図で歩ける城なんですね。これが私はけっこう感動的だなと思っています。それは今回、中井先生からもお話ありましたが、今、行われている発掘調査で見つかった登り石垣ですとか八幡台の石垣、それから水手御門みずのてごもん下の郭くるわとその石垣、そういったところも含めて、先月ご案内いただいたときに、私、まさにこの古絵図(フォーラム資料p.4 図1)を見ながら城を歩いたんですね。すごいことだと思うんです。最近わかりやすく起こしていただいた測量図ですとか縄張図よりも、この古絵図のほうが城を歩いていてわかりやすく、そしてかつての姿を想像しやすいなと思ってしまったんですね。こんな城はほとんどないです。私が知る範囲ではないかもしれないですね。これってすごく魅力的なことだと思うんです。それはすなわち城の骨組みみたいなものが米子城はそのまま残っているからだと思うんですね。

そこで、冒頭に言いましたように、建造物が残っていないと城としての価値が下がるような風潮があると思うんですが、ここに異議を唱えたいと思えます。ほかの城、例えばですが、有名な丸岡城なんですけれども、現存する12天守のうちのひとつであって、すごくいい天守というか、見応えがあって、わざわざ福井県に行く価値があるわけですが、じゃあ城内を歩くの

にどれくらい時間がかかるかという、そんなかかんないんですね。なぜかという、ぽつんと天守が残っている状態にほぼ等しいからです。すごくマニアックに見ていきますと、やはり城の骨組みって残ってますけれども、一般的に観光で行った場合は、今うなずいてらっしゃる方もいらっしゃいますが、下手したら10分で終わってしまう、天守なんか見ても30分くらいですかね。かといって、お城の周りをぐるぐる歩いておもしろいのかっていうと、ちょっとそうでもないですね。どうでしょう、丸岡から来た方はいらっしゃらないですよ、怒られちゃいますけれども。これが今の観光マップで、こんな感じだったなって思うんですけども、やはりここにぽつんと天守が建っているだけに近い。そして歴史資料館があって、公園にはなっているけれども、というような現状なんですね。

これは実は、私の来週発売される本に載せた案内図なんですけれども、撮影ポイントと見どころのポイントをそれぞれ引き出し線を引いて3つずつ上げるというのをやってるんですが、もの見事に天守だけに集中してしまうんですね。やはりそれくらい、例えばこの辺にある石垣が見どころだよっていうのがちょっとないような城になっているわけです。外堀の一部がこうやって残っているわけですが、どうでしょう、米子城の残っている一部の外堀と比べて、外堀らしさの低さっていうところですね。米子城の場合は外堀の一部が完全に中海の方に連結していて、あっ、ここから商業の船が出たんだなんていろいろ想像ができますし、風情がありますが、丸岡の場合は、あっ、何か一部残ってるんだなという程度にしかならないというのが現状かなというふうに思います。

こちらは宇和島城ですね。やはりここも天守は現存ではありますけれども、見ていただいたらわかるとおり、本丸にたくさん建物が残っているのかという天守だけなわけですね。宇和島城の場合は石垣もけっこう残ってますし、ある程度歩く楽しみはあるんですけども、やはり天守に気をとられて、天守だけを目的として行ったときに、何かすごく達成感があるかというところでもないわけです。そうですね、石垣のあたりにも見どころはもちろんあるんですが、やはり、天守だけに撮影ポイントが重なってしまうような現状があるかと思います。

これは長野県の松本城。ここも国宝の天守ですから、見応えがあるわけなんですけれども、でも、見ていただいたらわかるとおり、やはり天守周りだけが状態よく残っているということなんです。外堀だったり、外堀のかわりをした堀ですとか、そういった城の構造みたいところは見えるわけですから、歩いて楽しい城ではありますけれども、なかなかマニアックというか、「ブラタモリ」の世界というか、言われないとわからない、そんなような残り方なわけです。少し範囲を広げて外堀なんかは別として、本丸、二の丸、三の丸といういわゆる中心部は市街地化されていて、もう本丸と二の丸の一部しか残っていないような状態ですから、そういった中で中心部の構造がわかるかという、なかなかそれは難しいわけですね。

そういうところを比較していきますと、この米子城は、本丸、二の丸、三の丸といういわゆる中心部の城の構造がばっちりわかるというわけです。そして、この絵図というのが本丸、二の丸、三の丸あたりをあらわした絵図なんですけど、これを見て歩けるということは、ほぼこの

骨組みは残っているということになるわけで、その辺の残り具合の違いというところが魅力かなというふうに思っています。

構造的なことは、後でまた中井先生にもご質問しようかななんて思っていますし、先ほどお話がありましたけれども、登り石垣ですとか、3方向に伸びる石塁、堅堀、こういったものを使っている。そして、今それが見つかって徐々に明らかになりつつあるということは、この江戸時代に描かれた古絵図の姿に近づいていく、何だかタイムスリップしていくような途中段階が今、この米子にあるんだなというワクワク感もありますし、それがこれから解明されていくということは、この古絵図を持ってより歩きやすくなる、今後充実度が増していくということになるのではないかと思います。

そういった中で、この古絵図なんですが、色分けがしてありまして、濃くなっているところというのは1739年段階で確認ができたところだそうなんです。そして、薄くなっているところというのが、状況確認はできているけれども当時は使われていなかったというところだそうです。つまり、江戸時代に入っているかの段階で捨てられたような郭だったり、使われなくなった部分があって、そういった変遷がここに記されているわけですよ。そんなところでいいますと、お城の楽しさの一つである城の中のドラマ、変遷、こういったところを見れるのも米子城のおもしろさかなというふうに私は思っています。

これは新たに発掘された水手御門の下の2段の郭ですけども、もちろんそれもこの絵図に載っているわけです。このときには使われていなかったということで、濃い色がついていないわけですね。こんなところを歩けるというのもなかなかおもしろいところかなというふうに思っています。

それから、登り石垣ですね。もう皆さんご覧になったでしょうか。ご覧になっていない方は、明日、お城歩きイベントもありますし是非。米子城のいいところは、今日にでもすぐに登れるというところなんです。こんなにすぐに登れる駅近の城ってなかなかないものですから、うらやましい限りですね。これは登り石垣で感動している私の写真ですけども、こんなふうにならずと登っているということですよ。これがどんな意味をなすのか、先ほどの中井先生のお話にちょっと質問してみたいかななんて思ったところもあるので、この後お話をしていきたいと思っていますけれども、とにかく先生もおっしゃいましたが、日本で登り石垣が見れる事例というのは本当に少ないんですね。彦根城ですとか洲本城ですとか松山城、数えるほどしかない。そんな中で、新たな登り石垣の城というのが見つかったわけですけども、私はもう、日本一の登り石垣と言っていいんじゃないかと思っています。内膳丸の方からつながっているとすると、200メートルくらい余裕であるわけで、これほどまでに長大なものがこんなにひっそりと鳴りを潜めていたなんて信じられないなと思うところなんです。そんなふうにならぬ新たな発見があるというところも米子城の秘めたポテンシャルなんじゃないかなと思っています。

それから、先ほど言いましたけれども、本丸ですね。城の山の上から内堀跡とか外堀跡、寺院が立ち並ぶ様子、こういった江戸時代のドラマが見れるところも一つポイントかなと思いま

す。航空写真に文字を乗せた図（フォーラム資料p. 15）を教育委員会からお借りしたんですけども、本丸があって、二の丸、三の丸とすごくわかりやすいと思うんですが、かつての外堀、内堀というのはこんなふうになっていて、海がもうここまで迫っていたということなんですね。航空写真でこれができるというのもすごいことだなと思います。どうなっていたのかもわからない城が多い中で、こんなふうに構造がよくわかって、多少ここらへんが埋め立てられているにしても、やはりすごく海を意識した、海に突出したような立地なんだなということが今でも感じ取れる。これがもう米子城の何よりの魅力なんじゃないかなというふうに思っています。

ということで、2番目の勝負も米子城の勝利ということですね。やはり今申し上げたことの重複ですけども、古絵図で歩ける全国的にも希有な城であるところ。城歩きの楽しみの一つであるドラマ、変遷が歩きながら感じられるというところ。それから城の中心部の構造がよくわかり、お城だけではなくて城下の方も、すごく専門的な知識がなくても想像できて楽しめるところ。これがもう米子城の魅力かなと思います。その3つが、例に挙げた城で簡単にできるかということ、やはり難しいということになってきますから、そんなところで米子城の勝利ということで、2勝目ということにしたいと思います。（拍手）あつ、いいですね、無理やり拍手させてるような感じもありますけれども。いいんですよ、今日は私、米子城を盛り上げるのが役目と考えておりますので。

3番勝負の最後に、キーワード③「石垣」ですね。米子城に最初に来たときに本当にびっくりしました。こんなすごい城がこんな駅近にあるとは思わなかったのでびっくりしたんですね。もう明日にでも、今日の午後にでも行けてしまう。これが米子城の魅力だと思うんですけども、そんな中でも石垣の見どころは本当に素晴らしいと私は思っています。中井先生からもちろなりとお話ありましたけれども、いろんな石垣が見れるというのが米子城の魅力なんですね。先ほど言いましたように、お城というのは変遷があって、リフォームなどが繰り返されていくものですから、やはり石垣も積み直されていくわけですけども、米子城はその表情の違いを歩きながら楽しく知ることができる城なんじゃないかなというふうに思います。

おなじみの、本丸に上がったところの4段の石垣ですけども、よく見ると積み方の違いがあるんですね。先ほど中井先生からお話があった、積まれた時期の違い、築城の違いというところが如実に反映されているわけなんですけれども、同じただの石の壁に見えましても、積み方ってだんだん変わってくるんですね。単純に言うと、表面加工するようになってどんどんきれいになっていくということだと思うんですが、ほとんど成形しないまま積んだ野面積みのづらづから打込接うちこみはぎ、先ほど矢穴があるものは打込接になりますよというお話がありましたけれども、表面加工するようになってきれいになって、でもまだすき間があいてしまうので、小石を詰めていくようなことをやって、それがさらに発展すると切込接きりこみはぎという、パズルのようなきれいな石組みになっていくわけですね。普通に考えて、時代が進めばきれいに加工する技術ができてきたんだなということになるんですが、学術的なことは抜きにして、こんな石垣の表面を見ていくだけでも楽しいですよ。米子城というのはよく見ていくと、本当にいろんな表

情の石垣があって、すごくおもしろいんです。積み方が違うっていうことは違う時期に積みまれたのかな、どっちが新しいのかな、いつ積みまれたのかな、こんなふうに考えていくだけで、きっと米子城に5時間くらい入れるんじゃないかと思います。それは言い過ぎかもしれませんが、そんな楽しみがあるわけですよ。

余談ですけども、石垣を見るときに、隅の算木積み^{さんぎづみ}というのを見ると、古さがわかるんですね。これ、算木積みの構造をイラスト化したものですが、石垣の隅っこって単純に直方体の石を積んでいくのではなくて、こんなふうにかませて積んでいく。重さが分散していきますから強度が高まるということになりますが、算木積みも最初から完成しているわけではないので、やはり加工精度、完成度、これを見比べていくと、新しい石垣なのか、古い石垣なのかというのがよくわかるわけです。

ちょっと算木積みのお話をしますと、完成した方から見ていただくと、ものすごくきれいな、イラストに近いものだということがおわかりになるかと思います。ほぼ同じ大きさ、形に成形した直方体をかませて積んでいくわけですけども、すき間もない。算木積みというのは、一番下の石というのは斜めに差し込むように積んでいくものですが、当然ながら天端^{てんば}、てっぺんですね、というのは垂直、水平じゃなきゃいけない。上に建物を建てますから、真っすぐ水平じゃなきゃいけないわけで、直方体を積んでいってもこうはならないわけですよ。どこかで角度調整をしないとすき間が生じる。すき間が生じていないということは、この石は直方体ではなく110度くらいの開きがあって、調整しながらということになるので、なるほど技術があるんだなということになるわけです。

それから、石垣の隅っこというのは直角ではないものですから、直方体を積むとこの石の左右の部分ですね、これが入り組んだような、入り込んだような形に必ずなるわけで、そうっていないということは、左右にも少し開きがあるわけです。ですから、この石を取り外したら、きっと直方体ではなくて、横も上下も110度くらい開いた、そんな不思議な形をしているはずなんです。こうなるためには、ずれもなく、食い込みもなく、そういう技術が発展したんだなって思うわけですけども、そういった目で見ていきますと過渡期のものは、ちゃんと算木積みにはなってますが、やはり石の大きさが不揃いだったり、間にちょっと小石を詰めていたりというところで、少し見ばえが劣るわけです。さらにこの一番左を見ていただくと、もう完全に石の大きさもばらばら、それから食い込みやすき間が激しいということになりますから、なるほど左、真ん中、右と発展していったんだななんてことがわかるわけです。

しかし、これよりさらに未発達なものもあるわけで、ファスナーみたいにちょっとかませているような石垣もあったりして、そんな発展段階を見ていくと、石垣がいつつくられたのか、新しい、古いなどがわかるわけですから、ちょっと覚えておくと、お城へ行ったときに通ぶれるというところもありますね。積む技術の差にもよりますので、何年以降は算木積みが発達するとか、完成するとかいうのはちょっと言えないとは思いますが、やはり1605年ですとか10年ぐらいですと、もうほぼほぼこういった算木積みにはなっているのかなという印象を

受けます。

この完璧な算木積み、私は日本で一番きれいな算木積みだと思っているんですが、これは江戸城の天守台なんですね。江戸城の天守台というのは明暦の大火後に積み直しをされていますので、1659年ですね。ですから、かなり新しい、江戸時代に入ってからのものであるということになります。そんなことも踏まえながら米子城を歩いていただくと、隅角ですね、隅っこの石の精度なんかを見ていくと、新しいか、古いかなどの判断基準になるんじゃないかなというふうに思います。

この写真は江戸城ですね。東京から来たもので、江戸城もなかなかいい石がありますが、ちょっと宣伝しておこうかななんて思ってます。後で中井先生ともお話ししたいなと思ったのが、関東にいる人間としては、こちら西国の城の発展というのはやはりおもしろいなということですね。置いてけぼりの関東では秀吉につくらされてる城なんていう概念はないな、とかいろいろ思いながら聞いていましたが、天下普請でつくられた、徳川のお城ですので、これもまたなかなか見応えがあります。東京にいらしたら、ぜひ遊びに来てください。

これは姫路城。何で姫路城をあげたかといいますと、やはり慶長6年(1601)に築城を開始されているということなんですね。全国のお城というのは、1600年前後が圧倒的に多いような印象を受けます。近場でいいますと松江城。これも関ヶ原合戦後ということになりますから、要は何が言いたいのかというと、米子城の石垣、古いぞってということなんですね。

さて、米子城の話になるわけですがけれども、フォーラム資料(p.13)にも簡単に、「さまざまな時期の石垣が残る」と書いています。吉川、中村、幕末、近代と残っている。まるでクイズ大会のように、歩いてみるとおもしろいんじゃないかなというふうに思うわけですが、そうですね、この四重櫓のつけ根のところの石垣ですね、見ていただくと、こちら側の表情とこちら側の表面の表情と違うのがわかるかと思います。こっちの方がちょっとすき間もあるし荒々しい。こっちは何かやけにきれい、ぴちっと成形されているというところで考えていくと、あっ、ここの石垣とここの石垣は違う時期に積まれたんだなということが浮かび上がってくるわけで、隅も見ていただくと、ものすごくきれいに角っこを揃えているわけですよ。

こういったところを見ていくと、石垣の積まれた時期の違い、築城の違いというところがわかるわけです。よくよく見ると、天守の上の方もちょっと違うんですよ。そのまた上の4段目も違うというところで、このへんはおもしろいなって思います。それから、この四重櫓は幕末というふうに考えられているようですがけれども、あっ、やっぱり新しいんだななんていうふうに納得しながら見ていくとおもしろいんじゃないかなと思います。これがアップにしたものですが、やっぱり表面がすごくきれいに加工されていて、隅もぴったりくっついているというところですね。

今、見ていただいたものに、この四重櫓の隅石に対して、ちょっと暗いですがけれども、こちらの隅角を見ていただくと、違いは明らかじゃないかなというふうに思います。石がまだ不揃いでもありますし、算木積みもイラストのように均等に算木になっていないというところ

ですね。私、この石垣けっこう好きだなと思ったんですけども、いつの時代なんでしょう。私は吉川じゃないかなと一瞬思ったんですけども、そんなところの違いを見ていくのもおもしろいと思います。

それから、登り石垣ですね、先ほど熱く語ってしまいましたけれども、やはり登り石垣の希少性ですね。残存例の少ない中での希少性というところで、今はただすごいって言うだけでですけども、やっぱり米子城を語っていく上ではすごく重要なファクターになってくると思いますから、登り石垣から解明されていく米子城の実態ですとか城づくりの概念とか、そんなところも今後明らかになったりしていくでしょうし、私たちもここから想像できること、想像する楽しみというのが増えていくんじゃないかなというふうに思っています。

これは、矢穴ですね。矢穴をあける途中段階の石が米子城に残っていて、だから何だと思われるかもしれませんが、フォーラム資料の中に矢穴のあけ方というか、石の割り方が載ってましたけれども、この矢穴のあいてる途中の部分が残っている石があるのにはすごく感動しました。(p. 20) 先ほど中井先生からお話がありましたが、ミシン目のように、切り取り線のように穴をあけて、ここに力を加えてぱかっとなんて割っていくわけですけども、この穴をあける途中段階のものが残っているというのもおもしろいななんて思いました。端っから順番にあげないんだなとか思いましたけれども、そのへんも見ていきます。これがどこにあるのかはあえて言いませんけれども、探していただくとおもしろいと思います。意地悪しちゃいますけれども(「意地悪」と呼ぶ者あり)、こういうのを自分で探すのが楽しいじゃないですか。どうしても知りたい方は、こっそり後で聞いてください。

さて、ということで結論、3番勝負ですね。どっちが勝つのかわくわくしながら聞いていただいたと思いますけれども、石垣、これも米子城の勝利というところですね。ちょっと金沢城のお話を飛ばしてしまいましたが、金沢城はいろんなおもしろい石垣、いろんな積み方の石垣が見れる、石垣の博物館なんて言われてますけれども、これも江戸時代に入ってから積まれたものということになりますから、いわゆる始まりの古さ、吉川時代から徐々に江戸時代に入っても積まれていく変遷を見る、そういう視点でいいますと、やはり米子城というのは見どころがあるんじゃないかなというふうに私は思っています。

さて、3番勝負、自分でもひどかったなって、今、思ってますけれども、とにかく米子城は素晴らしいというところですね。私もやはり歩くのが楽しい城、こんなに歩くのが楽しくて、しかも気軽に歩ける城、それから閉鎖的ではないというところが米子城の魅力かなと思います。城下からも見えて、何かすごくシンボルだったんだななんていうところも感じさせますし、外から見ても素晴らしい、中を歩いても素晴らしい、何時間歩いてもいろんな意味で楽しめる。これが米子城の魅力かななんていうふうに思っています。

何が言いたかったんだかよくわからないと思われたかもしれませんが、お時間になりましたので、私の話はこれまでとさせていただきます。1時間近く聞いていただきまして、どうもありがとうございました。(拍手)